

ウドブキ(イヌドウナ)の増殖

1 ウドブキとは

県内では主に大北地域を中心に利用されている山菜で、キク科コウモリソウ属に分類され、標準和名をイヌドウナとといいます。ここでは、主に大北地域の地方名であるウドブキという名称でご紹介します。

ウドブキは草丈が 1.5~2m くらいになる多年生植物で、夏季に白い小さな花を咲かせます。葉

は三角状腎形で葉柄には広い翼があり茎を取り巻く特徴があります。

自生地は主に積雪の多い日本海気候の明るい林内や原野、草地などで、陽光の射し込まない暗い林内ではあまり見られません。また、乾燥しやすい場所は不向きなようです。

ウドブキの名の由来ははっきりしませんが、形態がウドとフキの中間的であるとか、風味がウドやフキに似ているなどの説があるようです。また、「ド」が濁音にならないウトブキという呼び方もされるようです。東北地方では、ホンナ、ボンナ、ドホイナなど様々な名称で呼ばれています。また、イヌドウナの近縁種にヨブスマソウがありますが、これ



図-1 初夏のウドブキ



図-2 ウドブキの若芽

も山菜として利用されます。

山菜としては、草丈 20~30cm の若芽の時期に地際から採取して利用します。

調理法は、ゴマ和え、クルミ和えや煮びたしなどのほか、天ぷらでも利用されます。また、塩蔵して保存し、塩抜きして煮物などにしても格別です。

2 ウドブキの増殖法

(1) 実生増殖

採取地や年によっても違いますが、おおむね 9 月中旬から 10 月上旬頃に種子を採取します。採取した種子は、そのまま秋のうちに播種します。これを「とりまき」といいます。

播種用土は市販の播種用土（鹿沼土と赤玉土の混合土など）や山土が利用できます。当センター内でプランター内に播種してスギ林床で管理したところ、翌春の発芽率は約 50% でした。

種子を紙袋に入れて倉庫内などで乾燥保存して、翌春に播種しましたが、まったく発芽しませんでした。

このことから、種子は長期間

乾燥させないほうが良いようです。また、種子を湿らせたモミ殻炭に混ぜて 3℃の冷蔵庫内で保存したところ、3 月上旬には冷蔵庫内で約 70% が発芽しました。このことから、低温湿潤保存が可能であり、保存期間などを検討することで、春季播種にも対応できることが示唆されました。



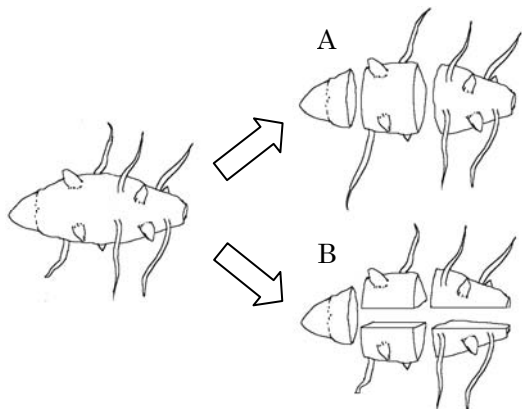
図-3 ウドブキの種子



図-4 ウドブキの発芽

(2) 塊茎増殖

地上部が枯れる 10 月中旬から 12 月上旬頃に塊茎を掘り出します。塊茎を軽く水洗いした後、頂芽や側芽が 1 つ以上入るように、小刀などで切り分けます(図-5 参照)。切り分けた塊茎(以下「分割塊茎」)を鹿沼土や山土に深さ 2cm 程度に植え付けます。当センターで試みたところ、翌春にはすべての分割塊茎から発芽が見られ、得苗率は 100% でした。実生苗に比べ得られる苗は大きく、株養成期間も実生苗よりも短縮でき、成功率も高いので有利な増殖法と考えられます。



A・B どちらも可能です。

図-5 ウドブキ塊茎の分割模式図



図-6 ウドブキの塊茎



図-7 分割塊茎からの出芽

(3) さし木増殖

6 月頃、さし穂となる親株を採取してきます。茎の各葉柄の付け根部分を観察し、脇芽の有無を確認します。脇芽の付いている葉柄を 1 つ入れて長さ 10~15cm に切り分けます(図-8 参照)。こうして調整したさし穂を一晩水揚げさせます。さし木用土として市販のさし木用土や細粒の鹿沼土などを用意し、これにさし木を行います。ウドブキの発根はさし穂の下部切り口ではなく、葉柄の

付け根部分から生じますから、用土に挿すときは、葉柄の付け根部分が用土にかかるくらいの深さで行うようにします。さし木の終わったさし床は、明るい林床などに設置し、上部をビニールトンネルで覆い、さらにその上部を遮光率 70~80% の遮光ネットで覆います。さし床が乾燥しないように適宜散水を行いながら管理します。夏季にはトンネル内の温度が 30℃ 以上にならないように、時々通風を行うなどきめ細かな管理が必要です。さし木から約 2 か月もすると、葉柄の付け根部分から発根が見られるようになります。当センターでさし木を試みたところ、発根率は脇芽のあるさし穂では約 70%、脇芽の無いさし穂では約 15% となりました。さし木による増殖は、親株から得られるさし穂数も少なく、また、発根後の管理もデリケートなことから、実用化にはさらなる検討が必要と考えられます。

3 おわりに

ウドブキは春になると大北地域の直売所などで見ることができますが、山菜類が直売所の売れ筋商品ということもあり、ウドブキの需要は高いものがあります。直売所などで販売されるものはほとんどが自生地からの採取もので、県内では栽培はあまり行われていません。しかし一方で、ウドブキは里山や遊休農地での栽培品目としても注目されており、今後、ウドブキの栽培化が進むことが期待されます。

(特産部 高木 茂)



図-8 さし穂からの発根